

BOOK REVIEW

天空の城ラピュタ

宮崎 駿 原作・脚本・監督

スタジオジブリ 制作 ブエナビスタ ホームエンターテイメント 発売

古来から人間の求めてきた普遍的な欲求に、重力に抗するという避けがたい志向があったことは、航空機やロケットの開発に人類の注いできた努力の歴史を見れば明らかでしょうし、また想像力の世界では、天界を自らの民族の故郷に位置づけている神話が各地に遍在することでも証明できるでしょう。中でも、天空にかつて文明があったという伝説は我々の根源的な楽園観と深くつながっているに違いありません。

財力により、技術により、はたまた美に対する情熱により、人間が思い思いに再創造しようと努力してきたものは、つねに何らかの意味における、一個のエデンの楽園にほかならなかったのではあるまいか。黄金時代を再現しようという夢に憑かれるとき、ひとびとは必ず庭のイメージにつきあたる。

————— 澁澤龍彦「黄金時代」

ヒタキの巣をかける草原、廃墟の柱廊、水没した高層都市。宮殿への門をくぐると、草原は突然ジャングルへと転回し、見上げるばかりの木性シダの群落の間を始祖鳥のように羽を靡かせながら舞う鳥の群れ——亡き父や母の幻を追ってたどりついたシータとパズーの見た「ラピュタ」という天空の宝島のこの光景は、上の澁澤龍彦の言葉を重ね合わせてみると、庭のもつ天空への志向のイメージと見事に符合している気がします。黄金時代を「かつて」の「天空」にもとめるこのモチーフは、失われた楽園としてのエデンのもつ両義的な性格をあわせもっているといえるでしょう。

それにしても天空へと上昇する楽園のイメージが、必ず同時に過去への追慕を併せ持っているのはなぜなのでしょう。

軍や海賊に狙われる宝島としてのラピュタは、「かつて」おそるべき科学力で天空にあり、地上を支配した恐怖の帝国でした。その帝国の王族たちはしかし、「土に根をおろし風と共に生きよう。種と共に冬を越え、鳥と共に春を歌おう。」と唄われる Gondw 谷の唄のように、天空にあることを否定し、土の上の生活に帰ってゆきます。

黄金時代を取り戻すべく再び天空を目指したシータやパズーは、滅びの言葉によってラピュタを中空にとどめていた最後の重力を破壊し、この島を手の届かぬ宇宙へと解放しました。楽園は、その喪失によって楽園たりうる、というテーゼはここにも提出されています。

さて、一方、庭園の歴史をふりかえってみると、たとえばイトスギなど垂直に切りたった強いフォルムをもつ植栽をテラスの最下層に用いることによって、上昇の志向を表現していたイタリアの庭園では、同時に廃墟趣味やグロトトの流行を育んでいましたし、ギリシャのアテナイで行われていたアドニスの園と呼ばれる屋根の上に営まれる享楽の庭の祭儀は、同時に墮落や道德の権威の失墜の意味をもっていました。

上層にエデンの園をもち、下層に暗い要塞を抱えるラピュタもまた、これら庭園史に空想の部というページを書き加えるにじゅうぶんな庭のファンタジーとして、記憶にとどめておきたいものです。